

# 麦作

## 「北海道 麦作りに挑む人々」その9

小平町沖内 <sup>なか</sup>中 <sup>はら</sup>原 <sup>ひで</sup>英 <sup>お</sup>雄

### 1. はじめに

留萌振興局は、主な振興局における秋まき小麦（以下、小麦）の反収（22～28年までの最高、最低を除いた5年平均）で、残念ながら下位にある（図1）。

小平町は、日本海に面して楡条に広がる沢伝いの地形に農地が点在し、平地地帯に比べ作業効率が悪く苦勞する。しかも、泥岩を母材とする埴壤土は、作土層が浅く、透・排水性に難があり、小麦栽培にとって厳しい条件である。

しかし、水稲にとっては冷害や台風などの影響を受けにくい安定した地帯で、しかも、道内屈指の良食味地帯でもある。そんなこともあり中原氏の小麦栽培の歴史は、平成16年から始まり他管内に比べ浅い。当初から大豆間作小麦として取り組み、今年で13年目と

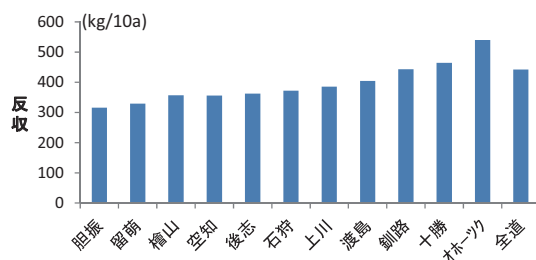


図1 主な振興局の反収

(H22～28年 7中5)



写真1 中原氏家族

なった。

中原氏の祖父がこの地に入植して本人で三代目となる。当時、胆振の旧追分町にある旧国鉄で働いていたが、家族が多く食糧難を解消するために祖母の出身であるこの地に入植したと言う。

昨年の普及センターによる坪刈りの実績では、700kg/10aを超えたが、10筆以上もある圃場間の差が大きく、目標としていた平均反収600kg/10aには届かなかった。しかし、今後とも水田転換作物として農業経営にとってもさらに重要性を増している中原氏の小麦栽培について紹介する。（写真1）

### 2. 地域の特徴および経営概要

#### (1) 小平町の気象および土壌条件

日本海を北上する対馬海流の影響により、同緯度の他の地域に比べ温暖であることから稲作や野菜が安定的に栽培されている。

土壌は、主に細粒質褐色低地土・灰色低地土が分布している。

中原氏が住む小平町沖内地区は、小平薬川の下流近くにあり、町の中心から比較的近い南側の山際に位置していることから、日本海側からの風に守られている。しかし、その分冬の降雪量が多い。（図2、3）

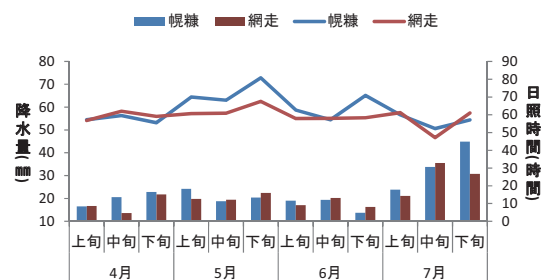


図2 2地区の降水量と日照時間の比較

(アメダス1981～2010年の平均)

左、棒グラフ～降水量、右、折れ線～日照時間

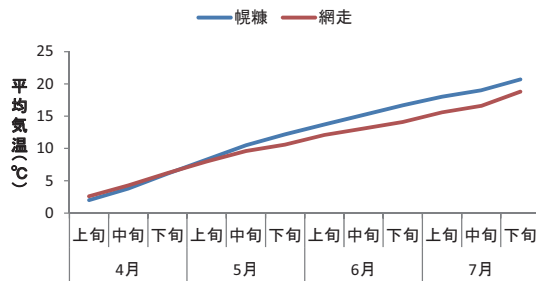


図3 2地区の平均気温の比較

(アメダス1981~2010年の平均)

## (2) 経営規模と作付け構成

家族は、84歳の父を筆頭に英雄氏（51才）と奥さんのみゆきさん（49才）、そして、3年前に拓殖短大（兼道立農業大学校稲作コース）を卒業し後継者となった悠平さん（23才）の4人である。また、家族の一員として親しまれているペットのレオン（♂）（8才）がいる。

経営面積は、41.1haで水稲+畑作の複合経営である。作物は、水稲、小麦、大豆、水稲の育苗ハウス後に緑肥えん麦を栽培している。各作物の面積と輪作体系は、表1、図4のとおり。

## 3. 小麦栽培の経過と特徴

### (1) 小麦栽培への取り組み

前述したとおり、平成16年から小麦を栽培し現在に至っている。平成14年頃までは、メロンを40~50a栽培していた。メロンは、昼に収穫し、夜は選果と文字どおり寝る間も惜しんで働いた。その頃が子育ての時期と重なり、子供にどう接したのかの記憶がないという奥さんの言葉には現実味がある。多忙極ま

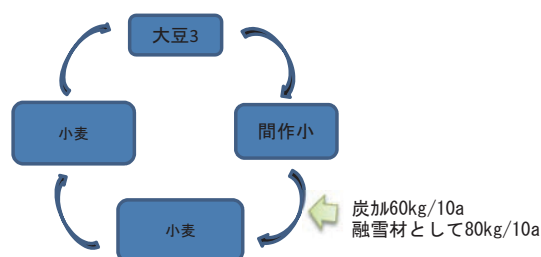


図4 現在の輪作体系

表1 作付割合 (H28年)

作物名	品 種	作付面積 (ha)	作付割合 (%)
水 稲	ななつぼし	14.7	36
	ゆめびりか	11.4	27
小 麦	きたほなみ	8.3	20
大 豆	とよむすめ	6.1	15
緑肥エン麦	-	0.6	2
合 計		41.1	100

る状況から抜け出した転機は、7ha余りの農地を購入した経営規模拡大であった。その頃の経営規模は、16haと地域の平均的な規模だったが23haとなった。それを契機に土地利用型作物である大豆を導入し、その後作として間作小麦を導入した。

### (2) 収量・品質

中原氏の5年間（平成24~28年産）の平均反収は、474kg/10aと町平均の1.8倍と高い。また、製品歩留り率では91%となっている。

(図6) 平成28年産の小麦品質評価項目では、1等Aランクの格付けとなった。(表2)

しかし、図6を見て分かるように平成25、26年は、気象的要因も重なり過繁茂となって倒伏が発生し、収量が落ち込んだことによる。

## 4. 技術の特徴

### (1) 起生期追肥のタイミングを逃さない

作土が浅く、下層土が堅いということは、黒ボク土地帯と異なり小麦の根は浅い。その条件を克服するには、とにかく肥料を切らさないこと、そして起生期追肥のタイミングが

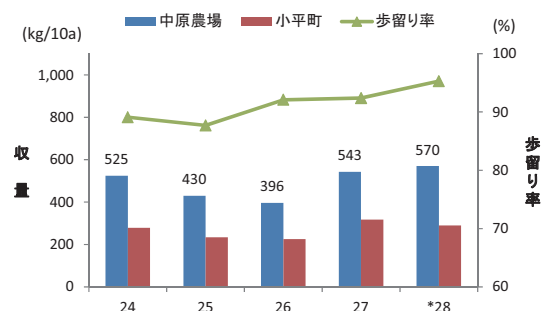


図6 中原農場と町との反収と歩留り率の推移

表 2 品質測定値 (28年産)

容積重 (g/ℓ)	F.N. (sec)	蛋白含量 (%)	灰分含量 (%)
866	400	10.4	1.6>

重要となる。つまり雪解け水が土壤に十分含まれている時期を狙わないと肥料が溶けずに効果は半減するからだ。

また、一度葉色が薄くなると葉色の回復に時間がかかる。そのため、麦の葉色や莖数を見ながら施肥量や時期を判断している。特に、赤かび病の防除と同時に1.5%の尿素の葉面

散布を実施している。(表3、4)

他地域に比べ施肥窒素量が多目であるが、この地帯の土質や地力窒素を考慮すると現在の窒素施肥量となっている。結果的には、近隣の小麦生産者に比べ量・品質ともに勝っている。

## (2) 大豆間作小麦を活かす

中原氏は、小麦栽培を始めた頃から大豆間作小麦に取り組んでいる。

水田転換畑の作物としては、大豆と小麦の2作物だけなので、大豆間作小麦は、水稻の収穫作業とも競合せず栽培しやすい。さらに、

表 3 病害虫防除等 (H28年産)

除草剤散布		融雪期	病害虫防除 (植物成長調整剤等)		
時 期	剤名・散布量		対象病害虫防除	時 期	使用薬剤・散布量
5月9日	バサグラン液剤 MCPソーダ塩	4月10日	眼紋病	5月9日	カンタスFL 1500倍
			植物成長調整剤 (2haのみ)	5月14日	サイコセル 500ml/10a
			植物成長調整剤 (全面積)	5月29日	エスレル 500倍
			赤かび病	6月11日	シルバキュアFL 2000倍
			アブラムシ		エルサン乳剤 1000倍
			赤かび病	6月19日	ベフトップジンFL 1000倍
			赤かび病	6月27日	シルバキュアFL 2000倍
アブラムシ	スミチオン乳剤 1000倍				

表 4 耕種概要など (H28年産) &lt;連作圃場&gt;

は 種 (kg/10a)			土 性	施 肥 (kg/10a)				根雪始	雪腐病防除		
期	量	方法		区分	窒素	リン酸	加里		月日	時期	使用薬剤名
9月10日	7	ドリル播き (ユンカリ)	植壤土	基肥	5.6	16.8	6.3	9月10日	H27.12.25	11月5日	フロンサイド水和剤
				追肥	8.4	-	3.2	4月5日			
					8.4	-	3.2	4月30日			
					4.2	-	1.6	5月16日			
					0.7	尿素の葉面散布		6月11日			
					0.7	(赤かび病防除 と同時散布)		6月19日			
					0.7			6月27日			
合計	28.7	16.8	14.3								

### <間作小麦>

は 種 (kg/10a)			土 性	施 肥 (kg/10a)				根雪始	雪腐病防除		
期	量	方法		区分	窒素	リン酸	加里		月日	時期	使用薬剤名
9月4日	20	大豆間作 (バラ播き)	植壤土	基肥	0.0	0.0	0.0	無	H27.12.25	11月5日	フロンサイド水和剤
				追肥	8.4	-	3.2	4月5日			
					8.4	-	3.2	4月30日			
					4.2	-	1.6	5月16日			
					0.7	尿素の葉面散布		6月11日			
					0.7	(赤かび病防除 と同時散布)		6月19日			
					0.7			6月27日			
合計	23.1	0.0	8.0								



写真2 小麦畑にて

越冬前に莖数や葉数を確保出来るというメリットも大きい。しかし、小麦の連作圃場ではそのメリットを生かせないのが現在の悩みのタネである。

一方、間作小麦のデメリットは、停滞水による裸地化や雪腐病の被害を考慮して播種量を多目に播く。しかし、被害が少ない年には莖数過多となって倒伏が発生し、低収となることを過去に何度か経験している。

### (3) 排水対策

中原氏は、父から経営移譲されてからの25年間で、経営規模が約4倍となった。このこともあり暗きょの施工は、30年前の実施以来されていない。その代わりに、排水不良畑では額縁明きょをこまめに実施している。

加えて、透・排水性改善のためクローラトラクタを使い2連のサブソイラ（2m間隔）による心土破碎を毎年行っている。

排水対策も含めた小麦の播種床づくりの手順は、以下のとおり。

#### 小麦のは種床作りと播種などの手順

- ① 小麦収穫後、ストローチョッパーで細断 1回
- ② ロータリで土と混和する 深さ5cm
- ③ サブソイラ2連 2m間隔 1回
- ④ スタブルカルチ1回
- ⑤ パワーハロー2回
- ⑥ 播種（播種機ユンカリ）
- ⑦ ケンブリッチローラによる鎮圧1回

### (4) 土壤改良材によるPH調整

一昨年までは、PHの調整材として生石灰やホタテ貝殻を60kg/10aを投入した。

昨年は、エンザイム有機631を40kg/10a播いた。また、毎年水田転換畑には融雪炭カルを80kg/10aを散布している。これらの土壤改良材の散布により、低PHによる小麦の生育障害はない。

### (5) 4日間で収穫できる体制整備の徹底

これまでの小麦づくりの経験から、4日間で収穫・乾燥できる体制の必要性を痛感している。日本海側のこの地帯は、小麦刈り取り時期の降水確率が他の地域より高いと言われる。アメダスによる過去約28年間の刈り取り時期の降水確率（図7）を見ても頷ける。つまり、コンバインと乾燥施設の能力の確保が重要課題である。

過去に、折角の生産物を目の前にして、収穫・乾燥能力不足が原因で涙を飲んだことを思い出すからだ。

このことを克服するために、徐々にではあるが収穫・乾燥体制を整備している。

現在の装備は、普通型コンバイン1台（HC1100）。乾燥機は、4基（40石×1基、30石×3基）で140石の能力がある。この体制であれば、4～5日あれば収穫・乾燥が可能となる。

さらに、現在新たに60坪の乾燥施設を建設中である。この施設には、新しく60石を3基導入する予定となっている。

この施設の完成により、さらに乾燥能力が

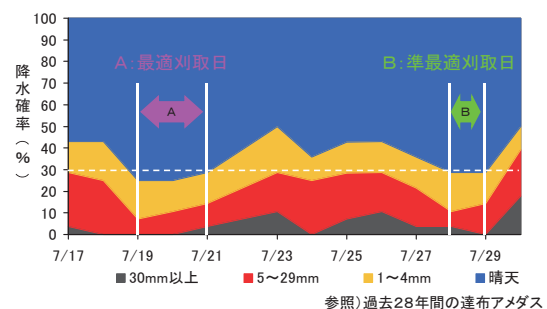


図7 秋まき小麦刈取時期の降水確率



写真3 建設中の乾燥施設



写真4 息子の就農を期に購入したクローラトラクタ

高まることを期待している。

### (6) 経営管理の徹底

父が還暦を迎えたことを機に、経営の名義変更が行われた。中原氏26才の時であった。世間一般からすると、少々早い経営移譲となった。

それ以来、伝票方式で複式簿記による経営管理をしてきた。過去には3年分の税務調査を経験したこともあるが、簿記記帳の取り組みが功を奏し、大きな指摘事項もなくクリアできたことは大きな自信に繋がったという。

平成9年頃からは、パソコンによる経営簿記ソフト「ソリマチ」を導入し現在に至っている。

度重なる規模拡大に伴う心労で、円形ハゲが出るほどのストレスを抱えた時期もあったが、データに基づいた経営管理や奥さんの協力によりその山を乗り越えることができた振り返る。やはり、家族経営は、「内助の功」によるところが大きいと強く感じた。

## 5. おわりに

今後の課題として、大豆と小麦の連作のため、連作障害から逃れられない状況にある。

そのため、とりあえず大豆・小麦の作付を3年から2年に短縮し、その間に緑肥作物を新しく導入した3作物の輪作体型を目標に掲げている。(図5)

規模拡大も限界に近づいているが、水稻

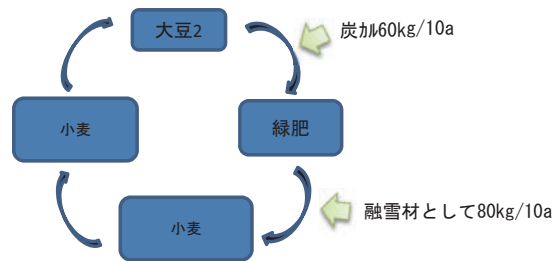


図5 目標とする輪作体系

の面積拡大は無理にしても、息子も加わったことと現在保有する機械能力を考慮し、また緑肥作物を挟んだ輪作体系ができれば、もう少し規模拡大は出来ると考えている。

中原氏は、とにかく家族との会話を大切にしている。その中に、悠平(23才)さんも自然に溶け込んでおり、全く親子の溝を感じさせない、和気藹々とした雰囲気である。(写真4)

### <中原氏のコメント>

忙しくて子供の面倒を見ることが出来なかったと振り返るご夫妻だが、「子供は親の背中を見て育つ」と言われるとおり、直接的には農業を継いで欲しいと言った覚えがなかったが、悠平さんは卒業後すぐに後継者となった。

喜びと共に、経営を息子にどんな形でバトンタッチをするかの責任が重いとのことだった。

(文責 北海道米麦改良協会 高橋義雄)